

増毛山道を甦らせた力

小杉測量設計株式会社

代表取締役 小杉 忠利

(NPO 法人増毛山道の会事務局理事)

平成19年晩秋のその日は雲一つ無い快晴だった。対空標識を設置した9月から2ヶ月余、毎日待った待望の空撮日和。この日がその年最後の航空写真を撮影できる日となった。標高約4千メートル、水平距離約30キロメートルを一気に飛んで、落葉した山林に隠された増毛山道の現況が撮影された。もし、この年この日がなければ、この後の行程は確実に1年は遅れたはずである。

70数枚のデジタル画像をオルソに編集し、実際に山道を踏査した地元の人達に来てもらい、立体画像を見ながら、昭和11年の実測図により位置付けされたルートとのずれを確認していく。痕跡のはっきりしない箇所は、試行錯誤を繰り返し、後に実際に踏査した位置情報と照合し、何とか32キロメートルのルートを確認させるこ

とができた。こうして、幌から別荘間の岩尾までの生活ルートを含む32キロメートルの古道が座標値を持つ山道として産声を上げたのである。

今から155年前の江戸末期、安政4年に開鑿された増毛山道は、石狩側の幌から増毛の別荘を結ぶ、断崖絶壁の続く海岸線を避けた安全な物資輸送の待望に応える国道であった。当時増毛場所の請負人であった2代目伊達林右衛門によって工事は行われた。工事費は、濃昼山道等も含めた約54キロメートル区間で、現在の貨幣に換算して2億円がかかったと言われている。

明治40年には、当時の陸地測量部により、1等水準点が測設されている。17箇所の水準点が、現在も国土地理院に記録されており、その内道内で一番標高の高いNo8462は、平成7年に1,037メートルの浜益御殿の山頂で発見された。



険しい山中をいく増毛山道は、その後海岸線に出来た集落間道路の利用が主になり、昭和16年の武好駅通の廃止と共に、山道を利用する人は殆どいなくなった。そして、昭和56年に、雄冬と増毛を結ぶ国道231号線が開通して忘れられた道となった。

平成17年に、留萌市で「国土地理院」と「留萌調査設計協会」の共催で伊能大図展を開催した時に、松浦武史郎関連で増毛山道の資料コーナーが開設された。この時以来歴史遺産として山道の復活を願う気持ちが次第に大きくなり、会社の測量技術を動員することと、留萌、増毛、幌の山道に関心のある人達とのつながりができれば復活できると考え活動を開始した。極めつけは空撮を実施することで、もう後戻りは出来ないぞと自身に命じることになった。

具体的な活動は次のようなことを行っている。

平成20年12月 増毛山道の会設立

平成21年 国有地を北海道に返還、国定公園内道有林開鑿開始

平成22年 **NPO 法人設立、HP 立ち上げ**、別荘～岩尾間16キロメートル開鑿終了

平成23年 一般募集体験トレッキング4回実施、案内標識設置、増毛山道豆辞典発行、石狩市と事

業協定締結

そしてこの間、パネル展や広報を積極的に実施し、パネル展は増毛町、留萌市、石狩市、北海道庁で実施し、報道関係の記事掲載は60数回を数えた。

平成19年から平成23年までの5年間、私達の活動を支えた大切なポイントは、

- 1 平成19年晩秋の奇跡的な雲量ゼロの快晴
- 2 増毛山道の復活を持ち望んだ地元の多くの会員達の無償の活動
- 3 会費の面で応援いただいた、調査設計業務等に関係する多くの法人や個人会員の皆様の暖かい申し出（心より感謝です）。
- 4 国有地を北海道に迅速に返還することができた関係者達の理解
- 5 暑寒別天売焼尻国定公園の規制区域内での活動を円滑に遂行してくれた行政の前向きな姿勢
- 6 山奥深い増毛山道が幸いして、近年の開発から逃れ、32キロメートルの全線が、開鑿当時からの姿や歴史を遺している道内唯一の古道

以上の6点である。

平成24年度からは、幌側からの山道復活を目標としている。

今度数年かけて、幌までの残り16キロメー



ルの山道復活を完成させ、北海道の文化遺産として道民の認知をいただけるよう努力していく覚悟である。

皆様には、今後とも会員として暖かい応援を頂けるよう、紙面を借りてお願い申し上げる次第である。

